三須錦吾家・山本東次郎家の代々

――岡藩の能楽関係資料――

飯塚　恵理人

はじめに

明治時代の幸流小鼓方の三須錦吾、大蔵流狂言方の山本東次郎は、いずれも豊後竹田の岡藩出身の能楽師である。江戸後期の岡藩は、藩士の阿南惟英が天保九（一八三八）年に『高安流仕舞附』[1]を書写しているなど、能楽愛好の土壌があった。三須錦吾・山本東次郎の二人とも、明治初期の能楽衰退期に東京を地盤とし、今日の能楽の隆盛の基を築いた功労者である。それでは、三須家・山本家は、岡藩において、どのような役職にあったのか、そのことについては従来あまり言及がないように思う。三須家・山本家の岡藩での勤務を示す資料として、ともに明治維新期に纏められた三須錦吾家の『勤録』（「豊後岡藩中川家文書」K157「勤録」三須氏「錦吾」「初太郎」）・山本東次郎家の『諸士系譜』（「豊後岡藩中川家文書」S470「諸士系譜」山本氏）を、岡藩藩主中川家の子孫に当たられる中川久定先生が所有されている。竹田市立歴史資料館の中西義昌氏のご仲介でこの資料を閲覧することができた。

三須家の初代は加賀藩、山本家の初代は尾張藩と、ともに他藩に抱えられている人の弟・子供が抱えられた。また、勤めはともに、「坊主」「御先徒士」などという形で、藩主のそばに仕えながら、役者以外の名称で勤める形をとっている。しかしながら、扶持の増額などは小鼓・狂言の芸に関して上達したことが理由とされており、「能楽師」もしくは藩主の遊芸の「師匠」としての性格をもっていたと考えられる。いずれも給録は高いとは言えないが、「坊主」の役職につきながら「当時勤方御免」など、本務であるはずの「坊主」の役職を免除されているなど、役者としての生活のために優遇されていることが伺われ、当然素人弟子への教授料等他の収入があったと予想される。また、三須家など明らかに藩邸の中の長屋に生活しており、住居等の保障もあった。また、初代の三須平左衛門は、嘉永三（一八五〇）年五月から嘉永四（一八五一）年春の藩主の岡藩下向に随行し、岡藩において幸流小鼓と葛野流大鼓を教えた。このことについては、「勤録」の嘉永四年の項に「辛亥年二月廿日、於豊州平左衛門儀、幸流小鼓為引立在番被仰付候処、同流且葛流（飯塚注「葛野流」の誤記）大鼓取立致世話、中ニは格別致昇達、御用立候ものも致出来候ニ付、御切米三俵御増被下置。」とあることによって知られる。岡藩において、小鼓・大鼓を習う人がおり、需要があったと考えられる。また、三須平左衛門が竹田に随行し、地元への指導によって切米を三俵増されていることは、藩主の参勤に、江戸の文化を地元に移植するという意図があったと考えられる。いずれ論文の形でまとめたいと考えているが、取り急ぎ、資料そのものを翻刻し、紹介したい。

凡例

一　旧字体は原則として新字体に改めた。

二　読解の便を考慮し、私に句読点をしるした。

三　年号の後の〇に西暦を記した。
四　原本の誤りと考えられるところは、そのまま翻刻し、〔飯塚注〕に飯塚の私見を記した。
五　飯塚の注は全て〔〕に記した。

①三須家（「豊後岡藩中川家文書」K157「勤録」三須氏「錦吾」「初太郎」）

〔表紙〕

『勤録　三須氏』　錦吾　初太郎〔中川家　352〕〔中川家文書　勤録　154〕

〔本文〕

三須氏

〔初代〕

松平加賀守様御家来

三須清四郎丈成弟

〇象成　平左衛門

一　天保十（一八三九）亥十一月、中ノ口番召抱、十八俵弐人扶持。
一　天保十一（一八四〇）子四月、以下坊主御取立一統勤。
一　弘化三（一八四六）午四月、御目見坊主。
一　嘉永元（一八四八）申四月、御先徒士勤是迄之通。
一　嘉永五（一八五二）子十月、容恭院様御住居奥番介。

嘉永七（一八五四）寅閏七月卒。

〔二代〕

嫡男

成美　錦吾

一　天保十二（一八四一）丑十月、銀百目壱人扶持。

一　弘化三（一八四六）午十二月、壱人扶持増。

一　嘉永二（一八四九）酉四閏月、御目見坊主被召出。勤方当時御免。

一　安政七（一八六〇）庚申正月、御先徒士御取立。

〔初代〕

一　始中ノ口番

終時御先徒士　　三須平左衛門象成

〔二代〕

一　始坊主　　平左衛門象成嫡男

今一代士籍（飯塚注：「今一代」は別筆）　　三須錦吾象福

〔三代〕

一　始一代以下坊主　　錦吾象福嫡男

今一代士籍（飯塚注：「今一代」は別筆）　　三須初太郎象寿

三須　　本国加賀

家紋　菱ノ花五ツ

〔初代〕

三須平左衛門象成

三須清四郎丈成弟

松平加賀守様御家来

一　天保十（一八三九）己亥年十一月廿九日、平左衛門儀、中ノ口番被召抱御切米拾八俵弐人扶持被下、御目付支配被仰付。

一　天保十一（一八四〇）庚子年正月七日平左衛門儀、兼而幸流小鼓致稽古候由、尚又不捨置心懸可申旨被仰付。

一　同（一八四〇）年四月廿一日、平左衛門義、小鼓御用立候ニ付、格別ニ御切米弐拾俵弐人扶持被下置。御目見以下坊主御取立。坊主一統之勤被仰付候。尚又可相励。支配之儀、是迄之通可相心得旨被仰付。

一　同（一八四〇）年十二月九日、平左衛門儀、殿様為御持金之内御祝被下置。員数ハ元占役可承合旨被仰付。

一　同十二（一八四一）辛丑年七月十三日、平左衛門儀、今度御馳走所出役被仰付、御役附拝見可仕旨被仰付。

一　同（一八四一）年八月廿一日、平左衛門儀、御馳走所出役入念可申旨、御意之趣支配頭申渡之。

一　同日平左衛門儀、今度御馳走御役ニ付、御條目可致拝聴旨被仰付。

一　天保十二（一八四一）辛丑年九月十五日、平左衛門儀、御馳走中致大儀候旨、御意之趣支配頭申渡之。

一　同日平左衛門儀今度御馳走無御滞被為済候ニ付、御祝被遊御酒頂戴被仰付。

一　同（一八四一）年十月廿一日、平左衛門義、当時御中屋敷御殿番御武具方下役兼相勤候様被仰付。〔飯塚注：この

一条は別筆後補。」

一　同（一八四一）年十月廿九日、平左衛門儀、御馳走中精出相勤候ニ付、御酒頂戴被仰付。

一　同十三（一八四二）壬寅年十月廿一日、平左衛門儀、御家督為御祝儀御料理頂戴被仰付。

一　同（一八四三）年十二月十六日、平左衛門儀、致皆勤候ニ付、御酒頂戴被仰付。

一　同十五（一八四四）甲辰年正月十七日、平左衛門義、旧臘廿八日暁鍛冶橋御門内ゟ出火追々及大火、風筋も不宜候処、両御屋敷御別条も無之候付、御祝被遊御酒頂戴被仰付。

一　弘化三（一八四六）丙午年三月廿七日、平左衛門儀、当正月十五日、本郷丸山辺ゟ出火追々及大火、風筋茂不宜候処、御屋敷御別条も無之候ニ付御祝被遊、御酒頂戴被仰付。

一　弘化三（一八四六）丙午年四月十九日、平左衛門儀、芸道御用立候ニ付、壱人扶持御増被下置。御目見坊主御取立被仰付。勤方是迄之通可相心得旨被仰付。

一　同月廿六日、平左衛門儀、坊主被仰付候ニ付　御目見。但御通掛。

一　同四（一八四七）丁未年十二月廿六日、平左衛門儀、致皆勤候段達御聴、御酒頂戴被仰付。

一　嘉永元（一八四八）戊申年四月八日、平左衛門儀、乱舞御用立候ニ付、格別ニ御先徒士御取立被仰付候。勤方是迄之通可相心得。向後御先徒士頭支配受可申旨被仰付。

一　同月十五日、平左衛門儀御徒士被仰付候ニ付　御目見。但御通掛。

一　同（一八四八）年十二月十六日、平左衛門儀、致皆勤候ニ付、御酒頂戴被仰付。

一　同二（一八四九）己酉年閏四月廿三日、平左衛門儀、先達而小屋替被仰付、当時御中屋敷長局之内一ト間御渡被下候処、兼而御能方被相願置候義有之候ニ付、其義茂聞届相成候義与相心得、同所隣室小屋江畳敷込、其上外囲、

板塀、風烈之節様候付取払、仮ニ奥深キ開キ戸取付、并中窓切下等、不相願一己ニ致取繕、此節御取調ヲ受、重々不念之段、奉恐入、差控願之通相慎罷在候様被仰付。五月四日御免。

一 同三（一八五〇）庚戌年正月十五日、平左衛門儀、乱舞為引立、当夏御下向之節御供被仰付、御道中坊主勤被仰付候。御役付可致拝見旨被仰付。

一 同（一八五〇）年三月十九日、平左衛門儀、乱舞精出、御相手ニ茂罷出候ニ付、御切米三俵御増被下置。

一 同（一八五〇）年四月平左衛門儀、当夏御下向御供被仰付候処、次男鈷六義、教育究竟之年齢手放シ置候而は、稽古筋其外甚心配、其上自分儀、及老年、別而不快勝ニ付、為介抱、自分雑用ニ而御供巻之内ニ入召連度、左候へハ在番中同門小鼓取立之一助ニ茂相成、諸事都合宜ニ付、召連度旨願之通被仰出。

一 同（一八五〇）年五月十六日、平左衛門儀病気歎ニ付、御下向之御供御免被下置候。尤快気次第出立可致旨被仰付。同月廿一日江戸表出立。

一 嘉永三（一八五〇）庚戌年十月十五日、於豊州平左衛門儀、明春御参勤之節御供被仰付。

一 同四（一八五一）辛亥年二月廿日、於豊州平左衛門儀、幸流小鼓為引立在番被仰付候処、同流且葛流（飯塚注「葛野流」の誤記か。）大鼓取立致世話、中ニは格別致昇達、御用立候ものも致出来候ニ付、御切米三俵御増被下置。

一 同（一八五一）年十二月廿三日、平左衛門儀致皆勤候段達御聴、御酒頂戴被仰付。

一 同五（一八五二）壬子年十月廿日、平左衛門儀、容恭院様御住居奥番介被仰付。

一 同六（一八五三）癸丑年四月廿五日、平左衛門儀、近来御番方被仰付、精出相勤、且芸道茂手廣ニ致し候ニ付、御切米三拾俵ニ御直被下置。

嘉永七（一八五四）甲寅年閏七月廿七日卒。

〔二代〕

初称成美

三須錦吾　象福（キサヨシ）　前名　錦吾　平左衛門

平左衛門象成嫡男

一　天保十二（一八四一）辛丑年十月廿一日、錦吾儀、小鼓稽古一廉打込相勤可申候。依之格別ニ銀百匁壱人扶持被下。

一　弘化三（一八四六）丙午十二月廿一日、錦吾儀、小鼓稽古精出候ニ付、壱人扶持御増被下。

一　嘉永二（一八四九）己酉年閏四月十五日、錦吾儀、芸道致昇達候ニ付、格別ニ御目見坊主被召出。勤方は当時御免被下置。御宛行是迄之通可相心得尚又此上打込執行可致。向後御目付支配請可申旨被仰付。

演説　乱舞御相手罷出候節は中小姓格合ニ可相心得候。

一　嘉永二（一八四九）己酉年五月廿五日、錦吾儀坊主被仰付候ニ付、御目見。但御通掛。

一　同三（一八五〇）庚戌年十二月十六日、錦吾儀、当夏以来致皆勤候段達御聴。

一　同七（一八五四）甲寅年十月二日、錦吾儀、御切米弐拾俵ニ御直し被下置。

一　安政三（一八五六）丙辰年四月十六日錦吾儀、小鼓致昇達、旧冬は重き伝授も相済候付壱人扶持御増被下置。猶又可相励旨被仰付。

一　同（一八五六）年八月六日錦吾儀去ル四日夕、入湯罷出途中ニ而石塚宗哉ニ出合、土橋寄合町恵沢屋と申店ニ立寄、酒食相用候處、宗哉義大酩酊ニ而長座ニ相成、御定刻過罷帰候始末、奉恐入差控願之通被仰付、同九日御免。

一　安政四（一八五七）丁巳年十二月廿一日、錦吾儀、乱舞稽古精出業前致昇達候ニ付、御目録被下置。

御目録　麻御上下一具

一　同六（一八五九）己未年三月十六日、於支配頭宅錦吾儀松平大和守様御領分上州厩橋ニ而神事能取立之企有之旨相願罷越、其後於先元病気相煩難罷帰趣ニ而日延相願、備後福山江罷越候次第、手形能申出候得共、不案内とは御申訳立候儀茂有之候ハヽ、有体ニ願出可申処、其儀茂無之、剰日延願聞届之様子茂不承、旁以上を不恐致し方、一統之風儀ニ茂相拘重々不埒至極ニ付、御徒士当時介御免、坊主一統之勤被仰付、遠慮被仰付、屹度相慎可罷在旨被仰付、四月六日御免。

一　同七（一八六〇）庚申年正月十一日、錦吾儀精出相勤乱舞小鼓格別昇達候ニ付、御切米三拾俵ニ御直被下置。御先徒士御取立被仰付候。向後御先徒士頭支配受可申旨被仰付。

一　萬延元（一八六〇）庚申年十二月廿日、錦吾儀当年御滞府之處御用弁宜致一和相勤候ニ付御目録被下置。　御目録

金百疋

一　文久元（一八六一）年辛酉年十二月廿六日、錦吾儀致皆勤候ニ付、御酒頂戴被仰付。

一　同二（一八六二）壬戌年正月十五日、錦吾儀、当夏御下向之節御供被仰付。

一　同（一八六二）年十月六日、於豊州錦吾儀、御徒士被仰付候ニ付、御目見　但御通掛。

一　同月九日、於豊州錦吾儀、帰府被仰付。御発駕御同日出立可致旨被仰付。

一　同（一八六二）年十一月廿六日、於京都錦吾儀、御用向有之ニ付、兼而被仰付置候。帰府明日出立、熊田陽介一同罷越候様。依之道中通駕被下置。

一　元治元（一八六四）甲子年三月十一日、錦吾儀、先月四日夜御隣家内藤紀伊守様御下屋敷ゟ出火之處、御屋敷別条無之ニ付、御祝被遊御酒頂戴被仰付。

一　元治元（一八六四）甲子年十二月十六日、錦吾儀致皆勤候ニ付、御酒頂戴被仰付。

一　同二（一八六五）乙丑年正月十一日、錦吾儀、精出相勤候ニ付、御切米三俵御増被下置。
一　慶応二（一八六六）丙寅年十月二日、錦吾儀、此度深以思召定府一統御在所勝手被仰付。
一　同三（一八六七）丁卯年十月朔日錦吾儀、亡父之名ニ付、平左衛門与更名願之通被仰出。
一　同四（一八六八）戊辰年八月晦日、平左衛門義、精出相勤候ニ付、御側徒士被仰付候。勤方当時是迄之通可相心得、向後御側徒士頭支配受可申旨被仰付。
一　明治二（一八六九）己巳年四月十九日、平左衛門儀、御改革ニ付、第五等上被仰付、勤方当時是迄之通可相心得、向後横田藤右衛門・熊田清六・古澤九郎右衛門支配受可申旨被仰付。
一　同（一八六九）年六月四日平左衛門義、更疾撃隊弐番隊被仰付。向後隊長熊田清六支配受可申旨被仰付。翌（一八七〇）午五月十五日御免。
一　明治三（一八七〇）庚午年二月十六日平左衛門儀、御差合ニ付、前名錦吾与更名願之通被仰出。
一　同（一八七〇）年五月十五日、御改革ニ付、右之通被命。

三須錦吾

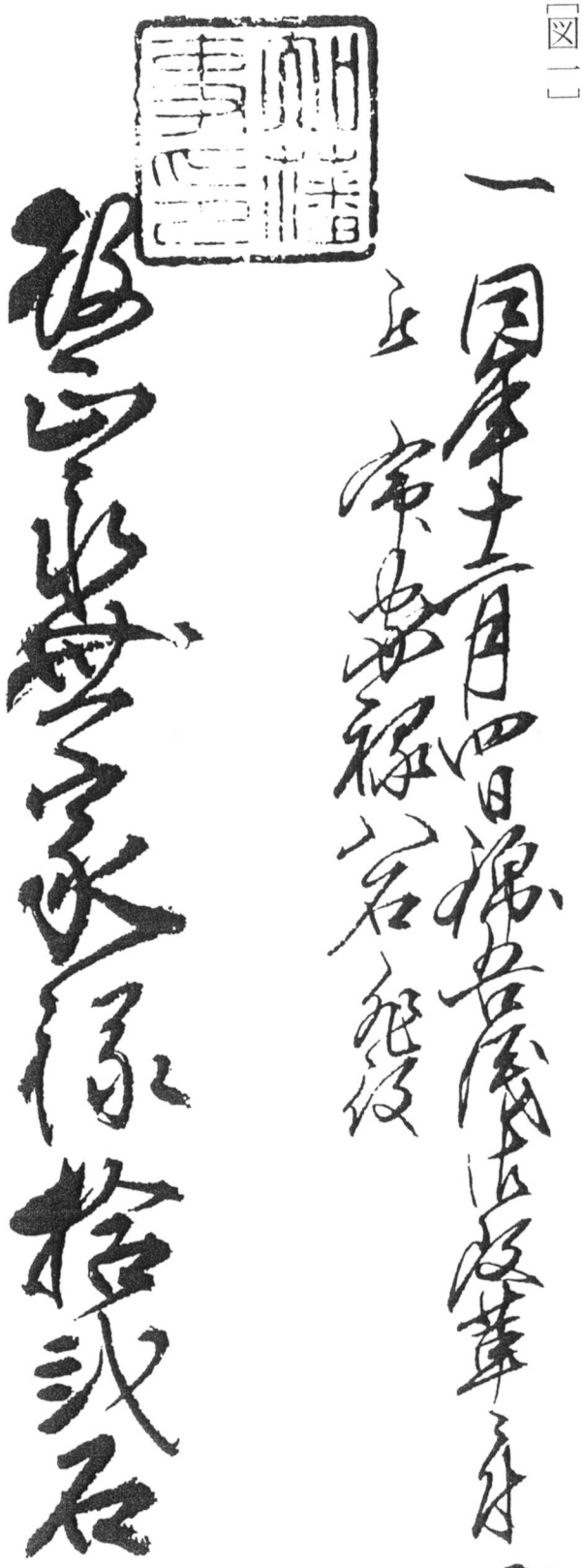
十等申付徒士申付候也。

但御渡方御改正現四拾九俵与成

一　同（一八七〇）年十二月四日、錦吾儀御改革ニ付、一代士籍被命。家禄八石非役。

［印：岡藩事務、［図一］に掲載。］改正永世家禄拾弐石

［図一］



〔三代〕

三須初太郎象寿　　前名　初之丞　初二

錦吾象福嫡男　　再　初之丞

一　文久二（一八六二）壬戌年十月十日、初之丞儀、銀百目壱人扶持被下置。一代格式御目見以下坊主被召出、坊主一統之勤被仰付候。尤小鼓稽古精出、年齢ニは宜敷出来候ニ付、格別ニ有髪ニ被仰付。向後御目付支配受可申旨被仰付。

一　同時初之丞儀、初二与更名。

一　元治元（一八六四）甲子年三月十一日、初二儀、先月四日夜御隣家内藤紀伊守様御下屋敷ゟ出火之處、御屋敷御

別条無之ニ付、被遊御祝御酒頂戴被仰付。
一　同年十二月十六日、初二儀致皆勤候ニ付、御酒頂戴被仰付。
一　慶応二（一八六六）丙寅年十月二日、初二儀、此度深以思召定府一統御在所勝手被仰付。
一　同（一八六六）年十二月十九日、初二儀致皆勤候ニ付、御酒頂戴被仰付。
一　同三（一八六七）丁卯年二月十一日、初二儀、乱舞稽古精出候ニ付、還俗被仰付候。此上専可相励旨被仰付。
一　同時初二儀初之丞与更名。
一　明治二（一八六九）己巳年四月十九日、初之丞儀、御改革ニ付、第六等上被仰付。当時勤方是迄之通可相心得。
向後大小監察支配受可申旨被仰付。
一　同（一八六九）年十二月二日、初之丞儀、鼓手被仰付、当時軍事局補助指揮受可申旨被仰付。
一　明治三（一八七〇）庚午年五月十五日、御改革ニ付、左之通被命

三須初之丞

十二等申付内家給仕申付候也。
但御渡方改正金弐両六俵与成。
一　同月廿二日初之丞儀、御差合ニ付、更名願之内、初太郎与相改。
一　同（一八七〇）年六月廿三日初太郎儀、御人繰有之ニ付、御内家給仕御免。西丸詰給仕被命。但監察支配可受候。
一　同（一八七〇）年十二月四日初太郎儀、御改革ニ付、一代士籍被命、四番小隊役拾四石。

②山本東次郎家（「豊後岡藩中川家文書」S470「緒士系譜」山本氏）

〔表紙〕
『諸士系譜　山本氏』　東次郎　〔中川家　447〕〔中川家文書　諸士目録　469〕
〔本文〕
山本　本国尾張
家紋〔〔図二〕に掲載。〕
〔図二〕

〔初代〕
尾張愛智郡名古屋檜橋（飯塚注：「檜橋」は日置橋の誤りか。）
山本太四郎則為三男

前名　多仲
山本猪兵衛

○藤原則盈

室　松崎権四郎某女
天保十一（一八四〇）庚子十月廿一日卒
法号　釈妙操信女　寺葬地　同上

文化六（一八〇九）己巳年十一月八日、被召抱下御屋敷御門番。
秩　十八俵二人扶持。
同十四（一八一七）丁丑年十二月廿一日　御取立格以下坊主。
文政十（一八二七）丁亥年十二月廿一日　右同御目見坊主。
天保十一（一八四〇）庚子年正月十一日　右同格御先徒士　御中屋敷奥番介。
在勤三十二年　秩廿七俵三人扶持格如故。
天保十一（一八四〇）庚子年八月廿一日卒。
法号　蓮光秋生信士　深川霊岸寺寺中成等院ニ葬。

〔二代〕
実速水猪八国能次男　前名　猪之助　和斎
則能　山本和吉
天保二（一八三一）辛卯年十二月十六日被召出、銀百目一人扶持。格以下坊主。

天保十（一八三九）己亥年四月十八日、病気養父内願ニ付御暇。

〔三代〕

実仲山猪蔵正直弟

植村出羽守家士　前名　斎宮

山本武兵衛

正方

室　父姓氏不詳。安政六（一八五九）己巳（ママ）（飯塚注：安政六年は「己未」）十月廿三日卒。

法号　教温貞意信女　寺葬地同上。

天保十一（一八四〇）庚子年十二月十三日被召出。秩廿俵二人扶持。格以下坊主。

在勤九年秩格如故。

嘉永元（一八四八）年戊申年十月十二日卒。

法号清兵元浄信士　寺葬地同上。

〔四代〕

実赤羽嘉助保直三男

前名　鉾次郎　登也　次郎太

山本東次郎

則正

室　三須平左衛門象成女

弘化三（一八四六）丙午年十二月廿一日被召出、銀百目一人扶持。格以下坊主。
追々累遷秩現四拾六俵　格十等御徒士。
明治四（一八七一）辛未年九月十四日、更ニ代々士族、家禄十二石ニ御直。

則忠　山本泰太郎（ヤス）
元治元（一八六四）甲子年八月二日生
双子
則之　山本幸一
則明　山本久米次郎
慶応三（一八六七）丁卯年七月廿六日生
虎正　山本武造
明治三（一八七〇）庚午年七月廿四日生

山本氏世譜

〔初代〕

山本猪兵衛則盈

山本太四郎三男　尾張愛智郡名古屋檜橋（ママ）

一　文化六（一八〇九）已巳（ママ）（飯塚注：文化六年は「乙巳」）年十一月八日、猪兵衛義、下御屋敷御門番被召抱。御宛行拾八俵弐人扶持被下置。

一　同七（一八一〇）庚午年五月十五日、猪兵衛儀御奥御未番介被仰付。
一　文化八（一八一一）辛未年五月十六日、猪兵衛儀、御奥御未番本役御道具方兼帯被仰付。
一　同九（一八一二）壬申年十一月七日、猪兵衛儀、御奥御道具方本役被仰付。
一　同十一（一八一四）甲戌年十二月廿三日、猪兵衛儀、御切米弐俵御増被下置。
一　同十二（一八一五）乙亥年十一月廿五日、猪兵衛儀、御奥御賄方定介御道具方兼帯被仰付。
一　同十四（一八一七）丁丑年五月廿九日、猪兵衛儀、御賄方本役被仰付。
一　同（一八一七）年十二月廿一日、猪兵衛儀、御目見以下坊主御取立。勤方支配之儀是迄之通可相心得旨被仰付。
一　同十五（一八一八）戊寅年四月晦日、猪兵衛義、今度御側女中御用向取計候付御目録被下置。御目録　白銀三両。
一　文政元（一八一八）戊寅年十一月十三日、猪兵衛儀、先達而御不例ニ付、御祈祷御札守差上、御満足思召候。此節御清快被遊候付、御祝御酒頂戴被仰付。
一　同（一八一八）年十二月廿日、猪兵衛儀出精相勤候付、御目録被下置。尚又御道具方兼帯相勤候付、別段御目録被下置。御目録　金百疋。別段御目録　白銀壱両。
一　文政二（一八一九）己卯年十二月廿四日、猪兵衛儀、兼役多ニ付、致扶持壱人扶持被下置。
一　同日、猪兵衛儀致皆勤候段達御聴、御酒頂戴被仰付。
一　同三（一八二〇）庚辰年十二月廿二日、猪兵衛儀、御前様御引移前後御用多相勤候付、御目録被下置。
　　御目録　金百疋
一　同日猪兵衛儀致皆勤候ニ付、御酒頂戴被仰付。
一　同六（一八二三）癸未年三月五日、猪兵衛義御〆リ方宜出精相勤候付、御切米弐俵御増被下置。

一同（一八二三）年十二月廿一日、猪兵衛義、御〆リ方心掛出精相勤候付、御目録被下置。御目録　白銀壱両。
一同八（一八二五）乙酉年九月五日、猪兵衛儀、出精相勤候ニ付、御切米三俵御増被下置。
演説　御役扶持は御引揚ニ相成候。
一同日猪兵衛義、御婚礼并貴姫様御婚礼御用向骨折相勤候ニ付、御目録被下置。御目録　金百疋
一文政九（一八二六）丙戌年十二月廿一日、猪兵衛儀致皆勤候ニ付、御酒頂戴被仰付。
一同十（一八二七）丁亥年十二月廿一日、猪兵衛儀精出相勤御締方等心掛宜ニ付、御目見坊主御取立被仰付。
一同十一（一八二八）戊子年四月十六日、猪兵衛儀坊主被仰付候ニ付、御目見。但御通掛。
一同十二（一八二九）己丑年十二月十八日、猪兵衛義精出相勤候ニ付、壱人扶持御増被下置候。尚又御取締筋心掛可申旨被仰付。
一天保二（一八三一）辛卯年十二月廿六日、猪兵衛儀致皆勤候段達御聴、御酒頂戴被仰付。
一同五（一八三四）甲午年二月十四日、猪兵衛儀去ル十日呉服橋御門内出火及大火上下両御屋敷風筋不宜御危難之処、何レ茂防方并御用物取片付等、精出御別条無之ニ付、為御祝儀一統御酒頂戴被仰付。
一天保五（一八三四）甲午年十二月十六日、猪兵衛儀致皆勤候ニ付、御酒頂戴被仰付。
一同六（一八三五）乙未年五月廿八日、猪兵衛儀精出相勤候ニ付、御切米弐俵御増被下置。
一同（一八三五）年七月十日、猪兵衛儀御屋敷替始、御殿向御普請等迄何れも精出相勤、万端無滞御成就相成御満足思召候。依之被遊御祝、御酒頂戴被仰付。
一同十一（一八四〇）庚子年正月十一日、猪兵衛儀精出相勤候ニ付、格別ニ御先徒士御取立、御中屋敷御住居奥番介被仰付候。向後御先徒士頭支配受可申旨被仰付。

天保十一（一八四〇）庚子年八月廿一〔飯塚注：「二」が「一」と訂正されている。〕日卒。

〔二代〕

山本和吉　則能（ノリヨシ）　前名　猪之助　和斎

実速水猪八国能次男

一　文政十三（一八三〇）庚寅年閏三月八日、猪之助儀山本猪兵衛養子願之通被仰付。

一　天保二（一八三一）辛卯年十二月十六日、猪之助儀銀百目壱人扶持被下置。御目見以下坊主被召出、坊主一統之勤被仰付。尤剃髪可致。向後御目付支配受可申旨被仰付。

一　同時猪之助儀、和斎ト更名。

一　天保三（一八三二）壬辰年十二月十六日、和斎儀、素読精出候ニ付、御目録被下置。御目録　唐紙

一　同四（一八三三）癸巳年十二月廿三日、和斎儀、素読精出候ニ付、御目録被下置。御目録　唐紙

一　同日、和斎儀、致皆勤候段達御聴、御酒頂戴被仰付。

一　同五（一八三四）甲午年二月十四日、和斎儀去ル十日呉服橋御門内出火及大火上下両御屋敷風筋不宜御難之処、何レ茂防方并御用物取片付等、精出御別条無之ニ付、為御祝義一統御酒頂戴被仰付。

一　同（一八三四）年十二月十六日、和斎儀手習精出候ニ付、御目録被下置。御目録　筆墨

一　同日、和斎儀、致皆勤候ニ付、御酒頂戴被仰付。

一　同六（一八三五）乙未年五月廿八日、和斎儀精出相勤、宿番茂致し候ニ付、壱人扶持御増被下置。還俗被仰付。

一　同時和斎儀、和吉ト更名。

一　天保六（一八三五）乙未年七月十日、和吉儀、御屋敷替始御殿向御普請等迄何れも精出相勤萬端無滞御成就相成

御満足思召候。依之被遊御祝、御酒頂戴被仰付。

一 同八（一八三七）丁酉年十二月廿六日、和吉儀武芸稽古精出候ニ付、御目録被下置。　御目録　矢羽三手

一 同日、和吉儀致皆勤候段達御聴、御酒頂戴被仰付。

一 同九（一八三八）戊戌年十二月十六日、和吉儀、剣術稽古心掛候に付、御目録被下置。　御目録　矢羽弐手

一 同十（一八三九）己亥年四月十八日、和吉儀病気ニ付、養父猪兵衛ゟ内願之筋茂有之ニ付、御暇被下置。

〔三代〕

山本武兵衛　正方

実仲山猪蔵正直弟

植村出羽守様御家来

一 天保十一（一八四〇）庚子年十二月十三日、武兵衛儀御切米弐拾俵弐人扶持被下置。御目見以下坊主被召出、坊主一統之勤被仰付。向後御目付支配請可申旨被仰付。

一 天保十二（一八四一）辛丑年四月十一日、武兵衛儀去ル八日夜六半時之拍子木廻掛ニ相成候処、当番ニ而申付方始末不行届、奉恐入差控願之通被仰付。同十四日御免。

一 同（一八四一）年八月十二日、武兵衛儀御馳走所出役被仰付候。御役付可致拝見旨被仰付。

一 同月廿一日、武兵衛儀、御馳走所出役入念可申旨。御入意之趣支配頭申渡之。

一 同日、武兵衛義、今度御馳走御役ニ付、御條目可致拝聴旨被仰付。

一 同（一八四一）年九月十五日、武兵衛儀御馳走中致大儀候旨、御意之趣支配頭申渡之。

一 同日武兵衛儀、今度御馳走無御滞被為済候ニ付、御祝被遊、御酒頂戴被仰付。

一　同（一八四一）年十月廿九日、武兵衛儀御馳走中精出相勤候ニ付、御酒頂戴被仰付。
一　天保十二（一八四一）辛丑年十一月廿二日、武兵衛儀、御側役之年札認被仰付。御使簡役下役之御用向、兼帯可相勤旨被仰付。
一　同十三（一八四二）壬寅二月廿一日、武兵衛義御家督為御祝儀御料理頂戴被仰付。
一　同十五（一八四四）甲辰年正月十七日、武兵衛義、旧臘廿八日暁、鍛冶橋御門内ゟ出火追々及大火風筋も不宜候処、両御屋敷御別条も無之候ニ付、被遊御祝、御酒頂戴被仰付。
一　弘化二（一八四五）乙巳年六月六日、武兵衛儀、御広間執筆介被仰付。
一　同三（一八四六）丙午年三月廿七日、武兵衛儀当正月十五日本郷丸邊ゟ出火追々及大火、風筋茂不宜候処、御屋敷御別条も無之候付、被遊御祝、御酒頂戴被仰付。
嘉永元（一八四八）戊申年十月十二〔飯塚注：「三」が「二」と訂正されている。〕日卒。

〔四代〕
山本東次郎　則正　前名　鉾次郎　登也　次郎太
実　赤羽嘉助保直三男
一　弘化三（一八四六）丙午年十二月朔日、鉾次郎儀、狂言稽古被仰付、宮野孫左衛門江入門仕候ニ付、師家付届金被下置。
一　同月廿一日、鉾次郎儀、銀百目壱人扶持被下置。御目見以下坊主被召出、坊主一統之勤被仰付。向後御目付支配請可申。尤狂言致稽古候ニ付、有髪之儘被召出候。尚又稽古可相励旨被仰付。
一　同時、鉾次郎儀、登也与更名。

一　弘化四（一八四七）丁未年十二月廿六日、登也儀、当格以来致皆勤候段達御聴。
一　嘉永元（一八四八）戊申年十二月二日、登也義養父武兵衛十月十三日夜病死ニ付、忌中去ル二日迄ニ而、翌三日出勤可仕處、心得違二日ニ出勤仕候段、奉恐入差控、願之通相慎罷在候様被仰付。同月五日御免。
一　同月廿四日、登也義、御切米弐拾俵弐人扶持ニ御直被下置。
一　同二（一八四九）己酉年四月十二日、登也儀狂言致上達候ニ付、還俗被仰付。猶又可相励旨被仰付。
一　同時登也義、次郎太与更名。
一　同三（一八五〇）庚戌年十一月十三日、次郎太儀、狂言稽古筋差支ニ付、東次郎与更名。
一　安政三（一八五六）丙辰年四月十六日、東次郎儀、狂言稽古精出格別致昇達候付、壱人扶持御増被下置。御目見坊主御取立被仰付。猶又可相励旨被仰付。
一　同四（一八五七）丁巳年十二月廿一日、東次郎儀、平生気筋能精出相勤候ニ付、御目録被下置。
　御目録　白銀三両。
一　同七（一八六〇）庚申年正月十一日、東次郎儀、精出相勤、狂言稽古格別致昇達候ニ付、御切米三俵御増被下置。
一　同（一八六〇）年二月朔日、東次郎儀先月廿四日高松丁蔵致出奔候処、兄ニ付、奉恐入差控、願之通被仰付。同廿一日、御免。
一　文久元（一八六一）辛酉年十二月廿六日、東次郎儀、御徒士定介被仰付。
一　元治元（一八六四）甲子年三月十一日、東次郎儀、先月四日夜御隣家内藤紀伊守様御下屋敷ゟ出火之処、御屋敷御別条無之ニ付、被遊御祝、御酒頂戴被仰付。
一　同（一八六四）年十二月廿一日、東次郎儀、精出相勤候ニ付、御切米三拾俵ニ御直被下置。御先徒士御取立被仰

付。向後御先格士頭支配受可申旨被仰付。

一　慶応二（一八六六）丙寅年十月二日、東次郎儀此度深以思召、定府一統御在所勝手被仰付。

一　同（一八六六）年十二月十九日、東次郎儀致皆勤候ニ付、御酒頂戴被仰付。

一　同三（一八六七）丁卯年十二月十二日、東次郎儀、御徒士被仰付候ニ付、御目見。但御通掛。

一　同四（一八六八）戊辰年九月十三日、東次郎儀、此度御軍備御改正、銃隊三ノ組ニ被仰付。古澤驎次郎指揮受可申旨被仰付。　演説　御軍役ニ付而は他支配たり共、本支配同様相心得候義勿論之事ニ候。

一　明治二（一八六九）己巳年四月十九日、東次郎儀、御改革ニ付、第五等上被仰付。勤方番時是迄之通可相心得。向後横田藤右衛門・熊田清六・古澤九郎右衛門支配受可申旨被仰付。

一　同（一八六九）年六月四日、東次郎儀、更疾撃隊三番隊被仰付。向後隊長古澤九郎右衛門支配受可申旨被仰付。

翌（一八七〇）午五月十五日、御免。

一　明治三（一八七〇）庚午年五月十五日、御改革ニ付左之通被命。

山本東次郎

十等申付徒士申付候也

但御渡方御改正現四拾六俵与成

一　同（一八七〇）年十二月四日、東次郎儀、御改革ニ付、代々〔飯塚注：「一代」を「代々」と訂正している。〕士籍被命。家禄十弐石非役。

〔印：　飯塚注：「岡藩事務」図一の印と同じ。〕

改正永世禄十弐石

注

（1）「［翻刻］飯富雅介師所蔵『高安流仕舞附―天・地・人―』」『夢幻能の方法と系譜』拙著　雄山閣　平成一四年三月発行　三六〇頁―四三二頁所収。

〔補記〕　貴重な資料の閲覧・翻刻を許可された中川久定先生に心より感謝いたします。また、岡藩の能楽資料について教えてくださった竹田市立歴史資料館の中西義昌氏に心より感謝致します。本稿は平成十七年度科学研究費基盤研究（C）、平成十七年度学術研究振興資金による成果の一部となります。